

パネルディスカッション「日露戦争はどう語られてきたか～明治末・満州・再生～」

田村俊子『海坊主』論

— 「熱帯の殖民地」から帰還する〈母〉と〈帝国〉

菊地優美*

1. はじめに

田村俊子『海坊主』は、1913（大正2）年10月に雑誌「新潮」に発表された短編小説である。本作は、「小学校」の「唱歌の教師」として働く「私」と、「ある熱帯の殖民地」の「大きな酒樓」で「抱妓たちに三味線の稽古をつけてやる」仕事を得て一人で出稼ぎに出ている母親の物語である。「熱帯の殖民地」とは、作品発表時の1913年時点で日本の殖民地とされ、亜熱帯・熱帯に属する台湾だと仮定できる¹。渡航から六年後に帰還した母親は変貌しており、その様子は「私」によって「酒気に粘ついた大声に誰を相手にしてゐるのかわからないやうな話」をし、「下卑た荒い言葉」で「熱帯の土人の笑ひ顔のやうに毒々しくその野卑に落ちた性情をすつかりと暴露する」などと語られる。そして、母親が「殖民地」で「海坊主」に「魅入られた」と言い出すのに対し、「私」は「其の顔を見詰めながら何うしてもこの母と争はなくつちやならない」、「母の身体を打ち据ゑてもいゝと思ひ」、「母の身体の方へ迫つて行く」といふ場面で作品は閉じられる。

本作には「殖民地」や「土人」などといった、日本帝国主義を背景にした表象や描写が登場する。ここで日本帝国主義について確認しておきたい。日本は、「台湾領有化」と、「日露戦争時の日韓議定書・第一回日韓協約による朝鮮の「保護国」化が〇五年（筆者注：1905年）の桂＝タフト日米協

定、第二回日英同盟及び日露講和条約によって保証されて朝鮮植民地支配体制が定まった」ことを「メルクマール」に、「他国・他民族を征服して大国を建設しようとする膨張主義・植民地主義」としての「帝国主義」に「転化」したとされる²。しかしその一方で、日本帝国主義の20世紀初頭における形成は、「国内的にはその条件がじゅうぶん成熟しないところで」、「対外的な条件に規定されて必然化したものであった」ため、「[「帝国」の建設のための軍事力の拡大、そのための重化学工業ならびにその産業基盤の育成、さらには植民地経営のための積極政策がたえず要求され、推進されなければならなかった]が、「それは国民経済の実力にくらべてあまりにも過大な負担であった」と指摘されている³。本作を読み解く上では、このような〈帝国〉としての日本の姿を念頭に置く必要があるだろう。

また、本作の時期設定は、1904（明治37）年から1905（明治38）年に起きた日露戦争の戦前・戦後の時期にあたる。日露戦争については、「日清戦争が文明国クラブに仲間入りするための「入学試験」であったとすれば、ヨーロッパの大国ロシアを相手とした日露戦争は、その「卒業試験」ともいふべきものであった」と言われる⁴。そこで確立された日本の「文明国」意識は、日本の植民地統治を支えるものであった。例えば、「[「同化」統治として位置づけられる]⁵日本による台湾の植民地統治においては、「文明及び文化の優劣、高低を一義的に解釈して、台湾人と日本人との差異をそのまま優越と劣等、進歩と未開の二極に位

*お茶の水女子大学大学院院生

置付け」たという⁶。日本による台湾統治は、日本が「文明国」であるという認識に立脚して行われたのである。そのことを踏まえれば、「殖民地」への渡航という出来事を軸に展開する本作は、日露戦中から戦後にかけての国内の社会状況に加えて、このような日本の植民地統治の様相についても考慮して読む必要があろう。

以上のことから、本稿では、『海坊主』における母娘の労働、母親による「海坊主」をめぐる語りの意味、そして「私」が母親を「打ち据ゑ」ようとする結末がどのように位置づけられるかを、作品の背後にある日本帝国主義と日露戦後という時間を視野に入れながら考察したい。

2. 母と「私」の労働—日露戦後の時間と〈帝国〉

先にも述べた通り、本作の時期設定は、作中の〈現在〉となる結末部を作品発表時と仮定すると、「窮迫した生活」を送っていた1901（明治34）年頃からの「五六年」の後、母親が「熱帯の殖民地」に出発した「六年」前の1907（明治40）年を経て、1913（大正2）年の母親が帰還した〈現在〉までを描いていることになり、日露戦前・戦後の時期と重なる。日露戦争後、戦中からの国家財政の膨張により、一般庶民は戦時中の非常特別税の継続と物価の高騰により生活苦を強いられた⁷。母娘のこの時期の貧窮は、母親が「役者狂ひ」で「有る財産をみんな盡してしまつた」ことに加え、このような国内の経済状況にも由来すると考えられ、「私」が「小学校」の「唱歌の教師」の職に就き、母親が「ある熱帯の殖民地へ出稼ぎに行」くことになる一因もそこにあると推測される。母親は、「其の殖民地の大きな酒楼へ招かれて行つて、其家の抱妓たちに三味線の稽古をつけてやると云ふ仕事」を得て、「働いてお金儲けをして、二人で気楽に暮らそうと考える。母親が得たこの仕事は、「殖民地」において芸娼妓たちを教育する役割を担うものである。日清戦争によって植

民地とされた朝鮮では、「日本人居留民や軍人の上陸・駐屯が増えると、その要所となった地域を中心に売春業は一段と活発になり、遊廓が形成されて」いったという。また、「居留民会にとって遊廓は、民会の財源の確保をも意味した」ともされる⁸。国家による公娼制度のもとに当地での軍隊や居留民の需要を引き受け、居留民会の運営にも一役買う植民地の遊廓とは、〈帝国〉日本の植民地経営において重要な役割を果たすものであった。「私」の母親は、そのような〈帝国〉の公娼制度と植民地支配に加担していくこととなるのである。

一方、「私」の労働も、日露戦争や日本帝国主義と無縁のものではない。永原和子氏は、「日露戦後の経済発展により生まれた新しい中間層ともいうべき俸給生活者・自由業者」が、「子女に中等教育程度の教育を受けさせることは当然のことと考えるようになった」という⁹。またその一方で、日露戦後の生活難の影響により、「女性の知的欲求の高まりと職業志向」が起こり、女性の「各種の職業学校への進学」が盛んになるとともに、「公教育制度の外」に「職業・技芸学校が多数出現していた」ことを指摘している¹⁰。母親が「私」に「頻りに学問をすすめて」、「私を音楽学校の専科に入れ」たということも、この日露戦後の職業・技芸学校の需要の高まりと重なる。

「私」が得た「小学校」の「唱歌の教師」という職業は、西島央氏が指摘するように、唱歌と式歌とを通じて人々を「“国民”として編成」する「媒介」としての役割を負うものであった¹¹。さらに、唱歌は子どもたちに〈帝国〉日本の臣民としての知識を学ばせる役目も果たしていた。渡辺裕氏によれば、明治40年代に刊行された『国定教材 日本地理唱歌』は、「東京から関東、東北、中部、近畿、中国、四国、九州、北海道、樺太、台湾と、全六四番で全国をめぐ」る唱歌である。このような「地理教育」を目的とした唱歌は、日本の地理についての知識を「歌というメディア

を使って、親しみやすい形で人々に記憶させ、身につけさせ、「国民を啓蒙してゆく」役割を果たしたという¹²。同唱歌の「台湾」の項には、「南のはての 台湾島、／新高山は 日本一、／都会は台北 台南や、／彰化恒春 賑へり。(筆者注：／は改行を示す)」とある。また、直前の「北海道 付樫太」の項には、「更に宗谷の 海峡を、／こえて彼方の 樫太も、／南半部は 帝国の、／版図と今は 成れるなり。」とあり、唱歌の中で「帝国の版図」を示す意図が見られる¹³。「台湾」の項もまた、台湾が「帝国の版図」であることを歌い手に伝達するものとみなせる。このように、唱歌は人々に〈帝国〉日本の臣民としての知識を身に付けさせる役割をも果たしていたことがわかる。したがって、「私」の「小学校」の「唱歌の教師」という職業は、子どもたちを唱歌を通じて国民化するとともに、将来の〈帝国〉日本の臣民として必要な知識を伝達する役割をも含むものであったと言える。母親と同様に「私」もまた、間接的に日本帝国主義に寄与しているのである。

以上に見てきたように、本作には日露戦後の国内の経済状況を生き抜こうとした母娘が、〈帝国〉に加担する労働へと駆り立てられていく様相が描かれているのである。

3. 「海坊主」と「私」の怯えの意味—〈帝国〉の脆弱さを照射する結末

渡航から六年後に「私」の元に戻った母親は大きく変貌していたと描かれている。その母親のふるまいの中でも、「私」は次のような母親の言葉に怯える。

「こつちの人間たちはまるで南京虫だ。」

母は何を標準にしてるのか、二と言目には斯う云ふ事を云つて罵つた。

「貝殻見たいな狭いところに屈み込んで、卑小な自分にばかりこびり付いて、まるで南京

虫のやうな人間ばかりさ。」

母はまた、多勢の人を連れて濠洲の方へ出掛けるのだと云つたり、今までみたところに自分の手で株式にした劇場を建築するのだとか云つたりした。今の実業界に有名な人たちの名を並べて、その人たちに自分が話し込めば誰でも一万や二万の金は出してくれるのだと云つて、母は自分の事業を起すに就いて大した手腕を持つてゐるやうな自信のある調子を見せた。(267-268頁)

「私」は母親のこの行動について、「一とつの魔物が母の身体を借りてみて、その魔物の眼を閃めかして物を言つてるのではないかと」思って「恐しかつた」と語る。「私」は母親を語らせる何者かを「魔物」と表現するが、母親が口にしたような言葉は、同時期の雑誌記事に見られる移民奨励の言説と酷似している。次に挙げるのは、雑誌「海之世界」(1913年2月)に掲載された横山源之助による「好望なる南米移民」という記事の一部である。

米価が頗る昂騰して、生活難の苦しき叫び声は日に増し加はるのが、日本今日の状態である。狭い猫の額のやうな土地に、今でさへ一ぱいの人があくせくして居るのに、年々五十万の人が増加する日本で、其日／＼の生活にさへ困しんで居るよりは、遠く海外に発展して、新植民地を開拓し其処を己れの領土として、新らしき生活を営んだならば、これ程愉快なことはなからうと思ふ。(後略)¹⁴

日本の狭小さを移民の推奨につなげるこの記事の語り口は、先の母親の言葉とよく似通っている。

台湾総督府は、内地からの移民が「台湾を中国大陸から切り離し、日本帝国の一部に組み入れるために」、「重要な役割を果たしうる」ものとみなし、移民政策を推進した¹⁵。移民が〈帝国〉日本

の植民地統治に利用されていたことを考えれば、「私」が言う、母親の「身体を借り」て彼女に語らしめる「魔物」とは、母親が「熱帯の植民地」で触れた、移民奨励言説を通した日本帝国主義だと言えよう。

「私」は母親に憑りついたこの「魔物」を恐れるが、さらに、母親の言葉にはもう一つの「魔性」として「海坊主」が現れる。母親が〈帝国〉を内面化しているとすれば、この「海坊主」もまた、母親の中の〈帝国〉が語っていると捉えられる。母親は、「植民地」で「私のすること」、つまり「魔物」たる日本帝国主義に加担する移民として取り組んだ事業が、「なんでも失敗しちま」った原因は、現地で見た「海坊主」に「魅入られた」せいだと語る。「私」が、母親のその語りに「少し甘えるやうな戦へを帯びてゐるの」を「はつきりと聞いてゐた」と述べる通り、母親の「海坊主」をめぐる発言は、母親自身の移民としての力量不足を隠蔽し、「海坊主」という、「土人」たちが住む「植民地」に根差した土着の文化を体現する存在によって事業が挫折させられたと、責任転嫁を図るものとみなせる。この母親の発言は、内地人や〈帝国〉日本の脆弱性を明るみに出すことにもつながりかねない、危うさを孕んだ発言であると言える。

当時の移民をめぐる言説には、一攫千金の夢を抱いて安易に渡航することは事業の失敗を引き起こすとする警告が見られるが、それは、実際にそのような移民が少なくなかったことを物語っている。1909（明治42）年に「経済時報」に掲載された「台湾移民に就て」という記事には、当時の移民について「邦人が移民として台湾に於て其実を挙ぐる克はざるは、何れも一攫千金の過去の迷夢より醒むる克はず、新領地とし云へは直ちに濡れ手で粟の攫み取を聯想して渡航するが故に十中の九分九厘迄は失敗と失望とに蔽はれて空しく母国に帰来」（筆者注：ママ）するのだと記されている¹⁶。この言説に見られるような移民たちの

安易な渡航や事業の失敗は、小熊英二氏が述べるような、「台湾に渡った植民者の多くもまた、内地で食いつめた下層民たち」であり、「人口密度がすでに高かった台湾では」、「農民として定住するよりも、総督府に寄生して一獲千金の利益を得ようという一旗組の比率が高くなっていった」という事実と関連する¹⁷。「植民地」まで行ってしまえば「その外にも自分の才だけで何かふんだんに金をむさぼる仕事が見付かるに違ひないと考へ」、その結果失敗して帰って来た本作の母親もその一人である。さらに、小熊氏は、台湾において内地人女性が「娼妓」や「芸妓」、「酌婦」として「台湾人に〈買われる〉」事態などを取り上げ、「植民者がこうしたかたちで原住民と関係をもつという事態は、周辺地域を領有する帝国でありながら、同時に貧困層を移民として海外に送りだす弱小国でもあるという、日本の国際的位置を反映したものであった」と指摘している¹⁸。これは、本稿の冒頭で触れたような、国内的な条件に未成熟さを抱えたままであった日本帝国主義の状況とも重なる。これらの事実を踏まえると、先の母親の「海坊主」による責任転嫁の発言は、彼女一人だけではなく、事業の才覚もなく植民地に渡航する貧困層を送り出さざるを得なかった自称「文明国」日本の、〈帝国〉としての脆弱さを照射する言葉でもあると言えるのではないだろうか。

また、小熊氏は、「台湾統治の事実上のトップである民政長官」¹⁹を務めた後藤新平が、講演「台湾協会設立に就て所感を述ぶ」（『台湾協会会報』2、1898年11月）において、日本人と台湾人との差異について、台湾の人々が「斬髪になつて洋服でも着て居ればもう少しも変はらぬ」²⁰とする認識を述べていたことを指摘している²¹。本作の母親が「海坊主」によって事業失敗の責任転嫁を図る姿もまた、この後藤の「日本の付焼刃の西洋文明など、台湾の人びとが「断髪（筆者注：ママ）になつて洋服でも着て居ればもう少しも変はらぬ」程度のものである」²²という認識に通じる

と言える。母親の「海坊主」への責任転嫁は、〈帝国〉日本の臣民が持つ「文明性」に疑義を生じさせる行為であり、内地人と台湾の人々間の「優劣」への疑念を生じさせ、両者の同質性を明るみに出すことにもつながると考えられる。

他方、「私」は、「母を魅入つたと云ふものが、私にまで魅入るのではないかと云ふ事をふと感じて」、「その魔性のものに対抗」しようとする。先に述べたように、「私」は、母親が内面化した「魔物」としての露骨な帝国主義的言説を恐れていた。しかしその一方で、母親の様子を「熱帯の土人の笑ひ顔のやうに毒々しく」と語ることから、「私」は「殖民地」への差別意識や、〈帝国〉日本の臣民として「たまたま『帝国』をもった有力民族がその支配下にある弱小の民族（自国内の移民であれ殖民地の諸民族であれ）に対してもつ優越意識」としての「帝国意識」²³を内面化していることもわかる。「私」が母親に憑りついた「海坊主」に対して「私をも魅入るかもしれない」と怯え、それを防ぐため母親を打擲しようとするのは、単に母親のように狂気を得ることへの怯えだけではなく、「海坊主」という「殖民地」土着の存在による脅威を受けることへの怯えでもあると考えられる。「私」は、母親の帰還当初から、母親への「熱帯」や「土人」の影響の有無に敏感である。例えば、「私」は母親の「皮膚」が「熱帯の恐い日光に犯されてゐ」ないかを確認したり、母親の表情について「熱帯の土人の笑ひ顔のやうに毒々しく」と述べ、母親に「土人」の影響を見出そうとしたりしている。「私」が「熱帯の殖民地」の影響を警戒するのは、「文明国」として「殖民地」を統治する立場にとって、「殖民地」の側に脅かされたり感化されたりすることは恐れるべきことであり、許されない事態であるからだと考えられる。したがって、「殖民地」土着の文化を象徴する「海坊主」に憑りつかれ、狂気を得た上に、先に指摘したように〈帝国〉日本の臣民としての脆弱さを露呈し、自身の日本に対する「文明国」意

識が脅かされることは、「私」にとって避けるべき事態だと言える。そのため、「私」は「海坊主」に憑りつかれたと語り、脆弱さを露わにした母親に「腹が立」ち、彼女を罰するために「何うしても」「争はなくつちやならないと思」うのである。そして、自身が「殖民地」に脅かされないためにも、「母の身体を打ち据ゑてもいゝと思」うのである。しかし、「私」の意図とは裏腹に、この「私」の怯えは、かえって母親と同様に〈帝国〉日本の脆弱さを垣間見せる結果となっていると言える。

殖民地に対する「帝国意識」は、「自国に従属している民族への人種的差別感に基づく侮蔑感と自民族についての優越感とによって支えられていた」という²⁴。『海坊主』という作品は、ここまで見てきたように、日本の〈帝国〉としての認識、そして日本の殖民地への「優越感」を支えた「文明国」意識が、「殖民地」によって脅かされる事態を描き、それらが揺らぐ可能性を示唆する作品だと言えるのではないだろうか。

4. おわりに

田村俊子『海坊主』は、日露戦争をめぐる国内の社会状況を生き抜こうとした母娘が、それぞれに〈帝国〉に加担していく様子を描くとともに、それを通じて日本の〈帝国〉としての脆弱さを明るみに出す作品として読むことができた。

田村俊子作品には本作の他にも「外地」や外国の表象が登場する。例えば、『炮烙の刑』（「中央公論」、1914年4月）では、主人公「私」が、他の恋人との逢瀬を理由とした、愛する男性との争いのさなか、逃避先として想起するのが「朝鮮の父」の元である。また、『母の出発』（「文章世界」、1915年1月）には、『海坊主』と同様に「ある熱い国」に出稼ぎに出ていた母親が登場する。

これらに現れた「外地」や外国の表象もまた、同時代の社会状況や〈帝国〉としての日本の姿と切り離しては考えられないだろう。それらがテク

ストにおいてどのような意味を持ち、俊子作品全体の中でどのように位置づけられるのか、今後の課題として考察を続けていきたい。

※田中俊子作品の引用は、黒澤亜里子・長谷川啓監修『田村俊子全集』第3巻・第4巻・第5巻（ゆまに書房、2012年11月～2013年2月）に拠った。

※引用は、旧漢字は適宜新漢字に改め、ルビ・傍点は省略した。

注

- 1 劉進慶「台湾」（秋庭隆編『日本大百科全書 第14巻』（第二版）、小学館、1994年1月）、603頁参照。なお、『海坊主』の同時代評には「ある熱帯の殖民地」を「南洋」と読むものもあるが（岩野泡鳴「十月の雑誌から」（『時事新報』1913年10月）、綾川武治・石坂養平「十月の文壇」（『帝国文学』1913年11月）、作中にそれを特定できる記述がないため、本稿では「殖民地」という表現に即し、台湾と仮定して読むこととした（宗像和重編『文藝時評大系 大正篇 第一巻 大正二年』（ゆまに書房、2006年10月）参照）。また、黒澤亜里子「解題」（黒澤亜里子・長谷川啓監修『田村俊子全集 第3巻』ゆまに書房、2012年11月、387頁）は、「山っ気の多い母親像は、実際に台湾に渡り、夫と一緒に事業（海水浴場）をやっていた俊子の実母をもとにした設定と思われる」と推定している。
- 2 村上勝彦「日本帝国主義の形成」鳥海靖・松尾正人・小風秀雅編『日本近現代史研究事典』東京堂出版、1999年8月、239-240頁。
- 3 柴垣和夫「Ⅲ「積極政策」とその財政的帰結」（『第一章 第一次世界大戦と日本帝国主義』）宇野弘蔵監修、林健久・山崎広明・柴垣和夫執筆『講座 帝国主義の研究 両大戦間におけるその再編成 第6巻 日本資本主義』青木書店、1973年6月、62頁。
- 4 小松裕『全集 日本の歴史 第14巻 「いのち」と帝国日本』小学館、2009年1月、55頁。
- 5 陳培豊『「同化」の同床異夢—日本統治下台湾の国語教育史再考』三元社、2001年2月、24頁。
- 6 陳培豊前掲書、26頁。
- 7 永原和子「良妻賢母主義教育における「家」と職業」（女性史総合研究会編『日本女性史 第4巻 近代』東京大学出版会、1982年5月、161頁）、井口和起『歴史文化ライブラリー41 日露戦争の時代』（吉川弘文館、1998年6月、192-194頁）を参照。
- 8 藤目ゆき『性の歴史学 公娼制度・墮胎罪体制から売春防止法・優生保護法体制へ』不二出版、2011年3月、99頁。
- 9 永原前掲論文、161頁。
- 10 永原前掲論文、161-162頁。
- 11 西島央「学校音楽はいかにして“国民”をつくったか」小森陽一・佐藤健二・川村邦光・市野川容孝・島村輝・津城寛文・西島央・坪井秀人『岩波講座 近代日本の文化史5 編成されるナショナリズム 1920-30年代1』岩波書店、2002年3月、261-267頁。
- 12 渡辺裕『歌う国民 唱歌、校歌、うたごえ』中央公論新社、2010年9月、65-66頁。
- 13 巖谷小波作歌・田村虎蔵作曲『国定教材 日本地理唱歌』（第三版）武田芳進堂・磯部屋書店、1907年10月、20-21頁（同書については、国文学研究資料館「近代書誌・近代画像データベース」より、立命館大学図書館 人文系文献資料室所蔵の同書画像を参照した）。渡辺氏が挙げる同書は1908年刊とされているが、本稿では1907年刊の同書第三版を参照した。
- 14 横山源之助「好望なる南米移民」「海之世界」7(2)、1913年2月、42頁。
- 15 松田ヒロ子「総説」蘭信三編『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』不二出版、2008年6月、517-518頁。
- 16 村上先「台湾移民に就て」『経済時報』80、1909年8月、4頁。
- 17 小熊英二『〈日本人〉の境界 沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』新曜社、1998年7月、74頁。
- 18 小熊前掲書、75頁。
- 19 小熊前掲書、105頁。
- 20 後藤新平「台湾協会設立に就て所感を述ぶ」『台湾協会会報』2、1898年11月、8頁（上沼八郎監修『台湾協会会報 第1巻』ゆまに書房、1987年11月）。
- 21 小熊前掲書、108-109頁。
- 22 小熊前掲書、108頁。
- 23 平田雅博「序章 いまなぜ「帝国意識」か—帝国意識と近年の帝国主義研究—」北川勝彦・平田雅博編『帝国意識の解剖学』世界思想社、1999年4月、2頁。
- 24 木畑洋一「第1章 イギリス帝国主義と帝国意識」北川勝彦・平田雅博編『帝国意識の解剖学』